テーマ投稿「私の休日 休暇の過ごし方」

サッカー試合見物

鎌倉市　長洲　堯雄

10月19日、日曜日、孫の大学生の計画で、娘一家と山形県天童市まで、サッカーの試合を見に行きました。山形県のサッカーチームと、熊本のチームの対戦です。J2リーグのチームの試合でしたが、スタジアム周囲は、試合開始前から屋台やキッチンカーが出て、盛り上がっていました。東京、羽田を7時過ぎの飛行機で出て、競技場には10時過ぎに着きました。寒いので温かい芋煮やラーメンを食べて過ごしました。

スタジアムには1万人弱の見物人が入っており、山形チームのファンで、青いユニフォームを着ており、ドジャースのスタンドのようでした。また場外にはくまモンの格好をした人もいました。熊本の応援団は30人程で、対照的に赤いユニフォームを着ていました。

下部リーグの試合ですが、熱気は十分感じました。試合が始まると、両チームの集団がボールを奪い合い、左右に動き回っていました。ロングパスやドリブルでの攻撃など、両チームで繰り返していましたが、スタンドからは、テレビで見るほど詳細な、ボールの動きを確認できないうちに、前半は終了しました。サイドが変わって後半戦が始まり、10分ほどして、地元チームがシュートを決めて得点を上げました。スタンドは大盛り上がりでした。その後敵チームが、素晴らしいシュートを打ちましたが、地元の黄色いユニフォームのゴールキーパーが、見事にパンチングでクリアーして、事なきを得ました。この時も地元応援団は盛り上がっていました。このまま地元の勝利を願っていた、ファンの期待もむなしく、終了間近に、熊本チームの地を這うようなシュートで1点を奪われてしまいました。落胆する地元勢の、最後の声援も空しく、試合終了を告げる長いホイッスルが響き、試合は引き分けで終了しました。

30年ほど前、平塚での、ベルマーレ平塚の試合を観戦したことを思い出しました。

帰宅の混雑をうまく避けて、山形駅に向かい、帰路の新幹線の中で、山形牛のお弁当を食べながら東京に向かいました。

土に生きる喜び：父から受け継いだ休日の過ごし方

平塚市　久保田　守

私の実家は農家でした。物心ついた頃から、生活の中に草むしりや野菜作りがあり、土に触れることは呼吸をするのと同じくらい自然なことでした。歯科医として多忙な日々を送るようになってからも、土への愛着が消えることはありませんでした。私にとって、土を避けるという選択肢はあり得なかったのです。

今から二年前に97歳で他界した父は、本当に農夫をしながら自営業を営んでいました。父が晩年よく口にしていた言葉があります。

「わしは、畑で草むしりをしながら倒れ、そのまま天国へ行けたら本望だ」。土と共に生き、その一生を土に還すことを願う、潔く、力強い言葉でした。

父が亡くなり、私はその畑と、長年愛用していた耕運機を相続しました。最初はどうなることかと思いましたが、「昔取った杵柄（きねづか）」という言葉の通り、春を迎え畑に雑草が生え始めると、私の体は反射的に動きました。すぐに耕運機を動かし、草むしりを始め、気づけば昔の父がやっていたように段取りを進めているのです。

現在、私の休日は、ほとんど畑で過ごします。特に日曜日は、早朝から畑に向かい、土の匂いを胸いっぱいに吸い込みます。地道な草むしり、畝作り、水やりといった作業に没頭していると、日頃の歯科医療の現場で感じるストレスは綺麗に洗い流されていきます。まさに土が私を癒してくれるのです。

現在は、ピーマン、ナス、キュウリ、玉ねぎ、トマトなど、朝取りの旬の野菜を朝食の食卓に、前日か当日の早朝に畑から採ってきたばかりの新鮮な野菜が並ぶ瞬間は、何物にも代えがたい喜びです。

72歳を迎えた私は、父が全うした年齢97歳まで歯科医療の仕事を続けたいという目標を持っています。この畑仕事から野菜を収穫するという実益とともに、集中力や心身の安定を兼ね備えた最高の健康法をもって、引き続き父から受けついだ畑を守りたいと思います。

ひ孫（みつき）が亡き父の畑仕事を見つめる（このように、今、自分の体が自然に動く）

秋に映えるリンゴたち（私の休日）

座間市　鴇田　尚樹

縁があって十月の連休に長野県小諸でリンゴ狩りをすることになった。子どもでもないのに何をやるのかとも思ったが、初めての経験であるし、リンゴ園というものがどのようなものか、興味をそそられた。

JR小諸駅前のタクシーに、リンゴ狩りをやっている農園を紹介してもらう。数分でリンゴ農園に着いた。そこから見ると小高い丘の斜面に沿って、見渡す限りリンゴの木が植えてある。驚くことに、観光客用にバーベキューやら、釣り堀なども整っており、だれでも楽しめる。受付に多くの種類のリンゴが展示してある。販売用かと思いきや、試食用であった。そのうちの一つを頬張りながら、急な斜面を上り、リンゴ狩り用に開放してある農園に向かう。右も左もすべてがリンゴの木である。しかも、種類が異なっている。説明によると今の季節ここでは五種類のリンゴが楽しめる。酸味が良い、糖度が高いなど様々な個性がある。すべての木にリンゴがたわわになっており、豊作とみられる。農園は、雑草一本生えていないし、枝はきれいにはらわれている。さらに、本来は5つの実がなるところを早期に4つをとってしまい、一つだけを残して大きくするそうだ。そして最後に作品といえるようなエリートリンゴが生まれ、私たちを楽しませてくれるのだ。土地の開墾や、品種改良の努力を考えると、感慨無量である。

気が付くと、リンゴ狩りに夢中になってしまい、時間が経つのも忘れてしまった。大量のリンゴは、段ボールに詰めて知り合いに送り、自分用や医院のスタッフのために苦労して持って帰った。いずれも大変好評であり、幸いであった。最も味がよく、大きいものは「秋映」という品種であった。

優雅に音と過ごす休日

大和市　武井　智昭

私の休日は、日常の喧騒から離れ、クラシック音楽の調べとともに心を満たす時間です。休日診療所勤務や学会などの用事がない朝は少し遅めに起き、まずはとっておきの音源でクラシック音楽を鑑賞します。特に好きなのは、モーツァルトの流麗な旋律です。目を閉じて深い構造と感情を湛えた音楽に身を委ねるひとときは、私にとって最高の瞑想となります。この静かな時間を持つことで、一週間で溜まった心身の疲れが洗い流され、感性が研ぎ澄まされます。クリニックの仕事などがなければ、自分自身が音を奏でる番です。25年間以上共にしているバイオリンを取り出し、練習を始めます。また、オーケストラやアンサンブルの練習に出席することや、演奏会に足を運ぶこともあります。現在はローデのカプリースを練習しています。練習中は、音程や表現で悩むことも多々ありますが納得いく形で弾けた時の喜びは、何物にも代えがたいものです。

このクラシック音楽鑑賞とバイオリンの演奏という趣味を通してこの音楽とともに過ごす時間は、私の人生の核であり続けると確信しています。